

「は〜い動かないでね〜。  
下手に動くと  
怪我することになるよ〜。」

「い、いきなり何をするのかね!？」

「あんたがここの  
正規の職員じゃないってのは  
バレてんだよね〜。」

「前回私達に何をしたのか、  
尋問させてもらいます!」

「…なるほど。」

証拠は残らないよう細心の注意を払ったが…  
僅かな違和感を元に感づくとは流石だ。

……くくくつ! だがもう遅い。  
お前たちはもう俺のモノなんだよ……!」

ドッ  
ドッ

ガッ  
ガッ

キッ  
キッ





ピリッ

あーっ?

「えっ?」

「お前たちの本当の任務はなんだ?」

ピリッ



ほー！

「私達の本当の任務は…」

「本当の…任務…？」

「うう…？」

ほー！



「私達の任務は  
「敵をセックスで墮とし、無力化する娼婦」です。」  
「私たちは『セックス大好きな淫乱』です。」

はっ♡

はっ♡

はっ♡

「何を今更…  
会話を続けて少しでも  
時間を稼ぐ気？  
だとしたら無駄だから。  
今から早速セツクスで尋問するからね。  
さつさとイって吐いちゃいな。」

「骨抜きにしますから、覚悟してくださいね♡」

「ふん。私の口は硬いぞ？  
お前たちの技術で  
回を割らせることが  
出来るかな？」

はっ♡

はっ♡

はっ♡

はっ♡



くくく…  
後から発動させるキーワードが  
設定されているとも知らずに、  
迂闊だったな…!!  
キーワードを  
言われたこいつらは、

①情報はセックスでイカせて  
引き出すものと思っでいる。  
②ちよつとのことでイクくらい  
身体の感度がアップしている。  
③性行為に関する倫理観や  
思考力が著しく低下している。  
状態になるようにしてある。  
つまり俺を追いつめているつもりが  
性奉仕することになるわけだ。

まったく間抜けな奴らだぜ…  
…それじゃ、この『セックス尋問』を  
堪能させてもらおうとするか…!!)



「あれ〜？ おじさんのおちんぼ、  
触つてもいないのにバキバキじゃ〜ん♡  
期待しちゃってるんじゃないの〜？」

「ふふ…どうやら思った以上に  
簡単に済みそうですね。」

「おつと…これはうっかりだ。  
だがまだ始まつてみなければ  
分からないぞ〜」



「ふっ… くっ…♡  
…ほらほら〜おじさんのおちんぼ…  
食べられちゃつてるよ〜？  
早く素直になった方が良いんじゃない？」

「く…っ 精液を搾り取るように  
膣壁がうねって…!!  
流石、鍛えられているな…!!  
だが、この程度ではまだまだ…」

「れる…くちゅ…  
こつちも…休ませませんよ…  
どうです？ 私の舌使いは…」

「ふむ…口内の敏感な  
部分を的確に責めてきて、  
否が応でも感度を高められる…!!  
こちらこそすごい技術だ…!!」





「はあああ♡  
おじさんのおちんぼすこつ♡  
尋問しなきゃなの♡  
奥に当たる度に  
頭真っ白になる♡」

「ふっ♡ ふっ♡♡  
れる…くちゅ…  
ディーブキス…  
気持ち良い…好き…♡」

「…男を墮とすのが目的だというのに  
すつかり自らが快感を得るために必死ではないか！  
乱雌どもめ!! このように食欲に貪られては  
こちらも長くはもたん…!」



「くっダメだ…！ もう出る…！  
よじっお前たちも一緒にイけ…！」

「ああっ  
腰の動きが激しく…!!  
それに硬くなつて…  
これダメツ…♡  
ああ!! ああああああ!!!」

「んっ♡ んっ!!  
んんんんんんん!!」



ゴッ  
ゴッ

ゴッ  
ゴッ

ゴッ  
ゴッ

ゴッ  
ゴッ

ゴッ  
ゴッ

ゴッ  
ゴッ

ゴッ  
ゴッ

ゴッ  
ゴッ

ゴッ  
ゴッ

ゴッ  
ゴッ

ゴッ  
ゴッ

ゴッ  
ゴッ



「ふう… くくく…  
最高の眺めだ…!!  
キーワードさえ使えば  
いつだってこいつらの  
身体を味わえる…!!  
これからもずっと  
使いつくしてやるぞ…!!」



「千束…いつまでも  
余韻に浸ってないで  
今度は自分でもっと  
激しく腰を動かせ。  
たきなももつと媚びるように  
奥まで舌を絡ませる。」

「ふあ…？  
くぅ♡んっ はあ…♡  
これで…良い？」

「ふもふも…  
分かりました…♡」

ふっ♡

ちゅぽ♡

ふっ♡

くちゅ♡

びゅ

びゅ

ふっ♡

ぐりっ♡

ぐりっ♡



「……  
すっかりセックスそのものに夢中だな。  
そういうえば、尋問はしなくて良いのか？」

「そんなの  
どうでも良いっしょ♡  
もっと楽しも♡」

「今度は是非喫茶店でも……♡  
制服でするとまた気分が  
変わるでしょうし♡」

「ククク！  
この調子では近いうちにキーワードも  
必要無くなるかもしれんな……！」



はっ♡

はっ♡

はっ♡

はっ♡  
はちゅん♡

はちゅん♡

ふっ♡

ふっ♡

ずっ♡

ずっ♡

くち♡

くち♡































